

寺田寅彦にかかわる話題二つ

千葉 明

1. 山田 功さんへの手紙

山田功さんから『教科書に掲載された寺田寅彦作品を読む』を贈られお礼の手紙を差し上げたが、その手紙を『櫛』に投稿したくなり、山田さんのお許しを得てこれをほゞそのまま投稿させてもらう事にした。

2020.5.27

山田 功様

千葉 明

拝啓

ようやく新型コロナウイルス対策の規制から脱する事になりましたが、しかしこれで一安心という気分には全くなれません、これ迄と同じような日が続きそうだと憂鬱な気分にもなります。

さて御著書『教科書に掲載された…』をご恵贈頂きましてお礼までに少し詳しく読後感を述べてお届けしようと思っておりましたが、今日になってしまいました。お許しください。

大変失礼ですが読後感を箇条書きにさせていただきます。

(1) 寅彦の作品がこんなに多く旧制中学の教科書に取り入れられているとは驚きでした。私も旧制中学に入学いたしましたが、私は当時の教科書は全部文部省の統括下にあって、ほゞ同じ内容の教科書を使用しているものとばかり思っていました。色々の教科書が用いられ、その中に多くの寅彦文が取り入れられていたという事なんですね。

(2) 私は実際の教育の現場には外来講師としてしか接したことがありませんので殆んど無知なのですが、戦後の教科書には読み方や考え方まで書かれているのですか。私の頃の本はたゞ本文が書いてあるばかりで、先生には難しい語句の説明を教えてもらっただけのような気がします。その点教科書の「学習の手引」は驚きです。どう読みどのよ様に考えるとか…はまるで教師への指導書みたいで、「森の絵」ではまさにその実例ですね。

(3) 「たぬきの腹つづみ」がローマ字文で載せられていた事はこれにも驚かされました。私は今、寅彦の筆記体のローマ字文について雑文を書いて雑誌に投稿中ですが、今の中学生は筆記体でローマ字文（英文）の読み書きをする事はあるのでしょうか。

(4) 私はこの『教科書に掲載された…』を、特に新任の教師の方々に読んでいただきたいと思いました。このような本の読み方をし、自分でも深く研究し、考究し、そしてこれを生徒に教える事が出来たなら、生徒はどんなに幸せな事でしょう。そしてこれは理科系の教師の方にも文科系の教師の方にも相通じる教育方法を論じた、そして自ら実行した山田さんの実践の証の本であるをつくづく思いました。

(5) 私の親や兄弟には実は大学、高校、中学、小学とそれぞれの場で教育に携った者が居ましたが、私は彼等がどのような教育をしたのか、恥ずかしいことに全く知りません。山田さんのような研究心を持って仕事に当たっていたらすごいなあと感じられた次第です。

(6) 最後になりましたが、『櫛』第 9 号の山田さんの「私の授業と寺田寅彦」を改めて読ませて頂きました。物理を山田先生から教えられた学生は幸せだったと思います。きっと、科学と文学の両方に興味を持つ学生が育ったんだらうと考えさせられました。

今日は法安桂子さんの『幻の父を追って』を盛岡大学図書館に寄贈の手配をした所です。

寺田寅彦、中谷宇吉郎、中谷治宇二郎ら先人を敬愛する人々が立派な本を色々刊行される事に敬意を表しつつ、うらやましく思っております。

それでは今日はこれで失礼いたします。雑言をお許し下さい。

敬具

2. 岩波茂雄から寺田寅彦への飛行

(寅彦の居る写真)

新型コロナウイルス騒ぎで家にとじこもる日が多い最近、久しぶりに岩波茂雄に関する本を読みたくなった。岩波茂雄や岩波書店について書かれた本は多く、古くは安倍能成の『岩波茂雄伝』(岩波書店 S.32) から比較的新しい『物語岩波書店百年史』(岩波書店 2013) にいたる迄、私の手元にも何冊かはあるが、それらの中で、山崎安雄の『岩波茂雄』(時事通信社 S.36) と『岩波文庫をめぐる文豪秘話』(出版ニュース社 S.39) の中に、寺田寅彦についての仲々ユニークな文があった事を思い出した。山崎の寅彦に関する文は文献としてはあまり取り上げられていないように思われたので、改めてこの『岩波茂雄』を手にとって驚いたことがあった。それはこの本の口絵に、三宅雪嶺を中心にして狩野亨吉・西田幾多郎らの著名な文学者と一緒の寅彦の写真があったからである。一体この写真は何の集まりだろうかと思ったが、場所(星ヶ丘茶寮)と時(1937)は書いてあるが、会合の目的は書かれていない。しかも 1937 年とは既に寅彦が亡くなっている年ではないか。

私は俄然この写真の由来を明らかにしたいとの思いにかられた。もしかしたらこれは寅彦の出席した最後の会合かもしれないという思いもあって…。

そこでまず『寺田寅彦全集』（岩波書店 1986）の日記等の資料に当たったが、これに該当するものは見当たらなかった。次に寅彦の学術的研究生涯の記述に詳しい矢島祐利の『寺田寅彦』（岩波書店昭和 24）を見ると、1935 年 8 月 14 日に、同じ星ヶ丘茶寮で会合とあったがこれは漱石全集の出版相談会であり、さらに矢口信也の『漱石全集物語』（青英会 1985）にも昭和 9 年（1934）早々、やはり赤坂山王の星ヶ丘茶寮で漱石全集出版の相談をしたと、これは松岡譲の文からの引用として書いている。しかしこれら星ヶ丘茶寮の会合には、寅彦は出席しているがあとは小宮豊隆や安倍能成等の人々で、狩野亨吉や西田幾多郎は含まれていない。

こうして結局星ヶ丘茶寮での会合については明らかにする事が出来なかった。

ところがその後この写真は『写真で見る岩波書店 80 年』にも載っている事がわかった。しかしこゝでも会合の日時も集まりの目的も書かれておらず、人名と場所だけが書かれていた。たゞこの本のストーリーから推察すると、どうも岩波全書の刊行と関係がありそうに思われたので岩波全書について少し調べてみた。

岩波全書は 1933 年（昭 8）の創刊であるが、その中には写真の会合の出席者である西田幾多郎が岩波全書 1 の『哲学の根本問題』を、寺田寅彦は同じく 10 の『地球物理学』を執筆していることなどから、この会は岩波全書の刊行に関わりのあった会合ではなかったかと推察した。

こうして最後は岩波書店に問合せしてみた。しかし『写真でみる岩波書店』の編集に関わった人は既に退職して明らかに出来ないが、たゞ写真のある場所からみてやはり岩波全書の刊行に関わる会合のように思われるという担当者の返事もらった。結局この寅彦らの写真の真相は明確にはわからずじまいになった。そしてもしこの写真が岩波全書発刊の

1933 年以前のものであったとすれば、寅彦がその以後に著名人と撮った写真は他にも残されているし、この口絵の写真は生前最後の会合時の写真ではないことになる。

こうして私の山崎本にあった寅彦の写真探しという本の遊びは終わった。

寺田寅彦、狩野亨吉、西田幾多郎という組合せは私にはとても興味深いものに思われたが、これを知る人はおられないだろうか。



三宅雪嶺をかこんで（1937年）星ヶ岡茶寮にて。右より岩波、狩野亨吉、三宅、西田幾多郎、寺田寅彦、岡田武松の各氏。